２０１２年８月号・季刊36号

ミンダナオの風

執筆編集＊松居友　　発行：ミンダナオ子ども図書館

ずっと考え続けてきた
生活自立支援と洪水対策を兼ねた
ゴムの木の植林支援を、
子どもたちの力でいよいよはじめた！
毎年のように洪水が襲うイスラム地域
その原因の一つが、上流の山岳地域の伐採。
ジャングルの木々の多くが、
高度成長期の日本に輸出されていった。
それを知って心を痛め、微力だけれども、
植林をはじめようと決心した。
何の木がよいかと考え続け
プランテーションなどの開発で低地を追われ
山岳地で、より貧しい生活を強いられている
先住民族の経済的自立も考えあわせると
地元の意見も取り入れて、
ゴムの木が良いと結論をだした。
地元の人々、特に子どもたちや若者たち
MCLの奨学生も参加して植林を開始。
写真のように、MCLで建てた保育園の
先生と子どもたちも参加した。
植林するのは、次世代を担う子どもたち
自分たちの力で、自分たちの村を作っていく
大きくなって大人になったら、
自分の子どもを、自分たちの力で
学校に行かせ、洪水も止められるように！
MCLの若者たちも手伝った。
イスラムの子もクリスチャンの子も
先住民の子たちと力を合わせて
宗教や種族の違いを超えて未来を作る。

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL
SEC REG.NO.CN200315083

とうとう戦争が始まった

国連の調べでは、避難民の累計が、世界で一番多いのがミンダナオだ。

たびたび戦争を体験しているせいか、去年の今頃から大きな戦争の予感があった。そして、ここ半年ほど、しだいに迫り来る戦争の恐怖が、波のように襲ってくるようになっていた。

それが今月になって、ひどい脱力感と鉛のように重いトラウマの再現となって、心どころか体を押しつぶしそうになっていた。はっきり言おう。

「戦争は大嫌いだ！武器を買うな！武器を持つな！武器を使うな！」

いよいよ戦闘が始まった。

8月8日、イスラム地域で避難民が出た。雨をよける場所もなく、子どもたちも地面のうえで寝ている。

避難民化した2日後に、緊急調査をし、その日のうちにビニールシートを買い、翌日には、緊急支援で雨よけのシートを届けた。しかし、避難民は増える一方でまだまだ足りない。

救済の様子は、多くの写真でサイトに載せたので見ていただきたいです。（検索『ミンダナオ子ども図書館』）

難民状態になっているのは、多く子どもたちで、その中には、ミンダナオ子ども図書館の奨学生たちも混じっている。それだけに胸が痛み、家に帰ってくると、忘れたはずのひどいトラウマが蘇ってくる。

くり返し襲いかかる戦争。２００８年の戦争の後、３年間は、トラウマに悩まされた。日本に滞在中も、ヘリコプターや飛行機の音が聞こえるだけで、背筋に悪寒が走り総毛立つ。

それがもどってくるのだ。昨夜も脱力感で、生きる気力が吸い取られた感じで、ひたすらこのまま死にたいと言う弱い気持ちになっていく。それを救ってくれるのが、いっしょに生活している１００人の子どもたち！

「あなたががんばらなくって、だれがこの子たちを養い育てていけるの！」

妻からもそういわれて、頑張ろうとするのだが、トラウマから逃げようとしても不可能で、それを正面から受け入れて進み続けるしかなさそうだ。

7月8日、一ヶ月前のサイトで以下のように書いた。

『ミンダナオの情勢は、表向きはＭＩＬＦとフィリピン政府のピーストークが進んでいる格好になっているが、私自身の所見では、非常に良くなく悲観的だ。ＭＩＬＦ軍もフィリピン国軍も、すでに戦闘準備に入っている。

７月１９日あたりから、ラマダンに入り、地域的な戦闘や爆弾事件、誘拐事件が頻発し、戦争への気分が、意図的に高められて、おそらく８月のラマダン明け１９日あたりから、リグアサン湿原などを舞台にして、イスラム軍が反撃を開始するというのが、過去の筋書きだが、今回も、ほぼ同様の筋書き通りに、事が進んでいるように見える。

ある意味では、さらに大規模に、ＭＩＬＦがいうように、最終戦に突入するのかもしれない。』

この様なところで子どもたちが寝ている

あれから約一ヶ月弱、想像したとおりの展開で戦争が勃発しはじめた。

http://www.tempo.com.ph/2012/kato-group-attacks-military-posts/

現在、戦闘を起こしているのは、政府と和平交渉をしているモロ解放戦線ではなく、ＢＩＦＭと呼ばれる分離過激派。ＭＩＬＦ側は、直ちに会議を開

『自由都市・堺 平和貢献賞』を受賞することになりました！
授賞式は、１０月２４日に堺市で行われます。
http://www.city.sakai.lg.jp/city/info/_jinkenbu/heiwa_index.html

き今回の戦闘には、関与していない、平和交渉における政府の回答を待っている、と表明したが、政府の回答しだいでは全面的な戦争に発展する。

ＭＩＬＦも交えた本格的な戦争が起こるとしたらラマダン明けで、この季刊誌が届くころには、かなりの規模で、戦争が本格的に拡大しているかもしれない。ＭＩＬＦ側は、今回の戦闘をミンダナオ全域を視野に入れた最終戦と定義している。

２００８年の戦争のときには、約８０万の避難民、２００２年のテロリスト掃討作戦の時は、１００万を超えた。悲惨さの度合いは、空爆なども含む戦闘の激しさと同時に、避難民生活が長期化するか否かにかかっている。

２００８年の戦争の時は、場所によっても異なるが、避難生活は６ヶ月から８ヶ月、ただ、その途中で洪水が起こり、難民支援と重ねて洪水支援も実行した。

しかし、２００２年の時には、難民生活は非常に長く、一年半から二年近く人々は、避難民状態を余儀なくされた。そのときの子どもたちが、笑顔どころか、表情がないのを見て胸が痛み、それをきっかけに『ミンダナオ子ども図書館』を始めたことは、度々、他誌でも書いてきたが、当時の子どもたちの悲惨さに、わたしはカメラを向けることもできなかった。

早急にシートを届けた。ＭＣＬだけがピキットで活動している。

今回の戦争は、勃発し始めたばかりで、どこまで拡大するのかわからないが、ＭＩＬＦ側は、ミンダナオの独立自治を要求しているし、リグアサン湿原の天然ガスと石油をめぐる利権の交渉も合意にいたっていない。

ＭＩＬＦ側は、今回の戦争を、最終戦と位置づけているので、２００２年以上に、ミンダナオのかなりの範囲に拡大する可能性があるかもしれない。

ダバオからコタバトに至る道路も、未だかつて見ないほどの大規模補修とコンクリート化が完了しつつあり、ラマダンに入ってからは、小さな誘拐事件や殺害や爆弾事件なども頻発しつつあったから、戦争は間近かと思っていたが、その通りになってきた。

山の先住民族地域にも、覆面をかぶった不気味な男たちがおおぜい入り、戦争を作る目的で派遣された暗殺団といわれているが、ミンダナオ子ども図書館の奨学生も恐ろしくて避難したりしている。

山岳地域では、ＮＰＡを対象にした小規模な戦闘も起こり、村の人々の顔も緊張気味だ。

軍の動きも活発だし、国際ＮＧＯも集まりはじめた。これら、典型的な戦争の前触れが至る所に見いだされる。

いつも支援ばかりお願いしているようで心苦しいのですが、子どもたちのために緊急支援をお願いします！

まずは雨よけのシートが緊急支援で必要です。１ロール１００メールが１万円で２０家族を助けられます。

緊急支援と書いて、振り込んでいただければ幸いです。

郵便振替口座：００１００ ０ １８０５７

口座名：ミンダナオ子ども図書館

今後も避難民が激増していく可能性があります。炊き出し支援や医療支援を状況に合わせて行っていきます。

何度となくくり返される戦闘にうんざりさせられますが、子どもたちのためにも、負けられません。

『自由都市・堺 平和貢献賞』を受賞することになりました！

授賞式は、１０月２４日に堺市で行われます。

http://www.city.sakai.lg.jp/city/info/_jinkenbu/heiwa_index.html

ＭＣＬ自体が苗床
子どもたちが育つ苗床

ミンダナオ子ども図書館の敷地で子どもたちが育てたゴムの苗を、自分たちでトラックに運ぶ。

この苗を植林して、下流のイスラム地域での洪水被害を少なくしたい、そして、貧困から土地を手放しがちな自分たち先住民族に、将来の収入をもたらし、自らの手で我が子を学校に行かせることができれば・・・という思いをこめて。

ゴムの植林プランは、海外のプランテーションや移民政策の土地所有で、もともと自分たちが住んでいた土地を失って山岳地に追われていった先住民族に収入を保証し、これ以上、土地を受け渡す必要が無いようにするために、最も有効な対策の一つ。ずいぶん長く考えつづけてきた生活支援プランだ。

ゴム農園は、ほとんどが大地主によるもの。そこで働けるのは小作たちで、先住民族は良くて日雇い。

しかしＭＣＬでは、地元の人々と会議を開き、協同組合的な組織を作り、村が管理する農園といった形で、村人たちとＭＣＬとが協働で管理する運営方式を選んだ。

収入の７０％は、村の発展に使われ、３０％は労働者へ。労働者は、村の極貧家庭の親や若者が選ばれる。ＭＣＬは、完全ボランティアでかかわる。

ゴム苗を育てるのは若者たち。この体験によって、農業技術を受け継ぐ事もできる。農業は、ミンダナオの基幹だ。お手伝いをすることで、地元に利益を還元し、子どもたちに、将来生きていく自信と夢をあたえてくれるプロジェクト。

むしろ心配なのは、日本の子どもたちの方で、「お手伝いなんかしなくても良いから部屋で、勉強してなさい！」そういわれて、部屋に閉じこもり机の引き出しから電子ゲームを出して孤独に一人遊んでいる？

本来子どもたちに必要なことは、家族や村が助けあい、生活のために協力し合う事だろう。貧困にあえぐ、マノボ族の村には貧しくても、そのようなすばらしい家族の愛や、人々のつながりが生きている。

先進国の人々は、現地を深く見ずに、子どもが親を助ける姿を見てチャイルドレイバーだ、と言うことがあるが、問題はそんなに単純ではない。競争原理よりも、ともに汗を流し協力し合い助けあって生きていくことを、お手伝いと遊びから学ぶことが生活の基本を作る？

このアラカン地域にも沢山の奨学生がいる。彼らが、積極的に今回の植林を支援している。

ＭＣＬで古着を渡しているので見かけはよいが、本当に貧しい地域の子どもたちだ。親のいない子も多く、こうした子たちがボランティアに積極的に携わり、自身の手で村を活性化していく。そうした体験の意味は大きい。

今回も、イスラム教徒の若者たちが積極的に参加してくれた。このアラカンの山から流れ出す泥流が鉄砲水となって、彼らの住むリグアサン湿原地帯をおそう。その根本的な原因を知り自らその対策にのり出す体験に大きな意味があると思う。

もちろん、ＭＣＬの奨学生たちだけではなく、作業の根幹をなすのは

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているＭＣＬのサイト
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm
ウエッブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！

地元の人たちや子どもたち。その多くは、奨学生たちのお父さん、お母さん、お兄さんや弟姉妹。

「親の背中を見て育つ」と言う言葉が、そのまま通じるような場面に良く出会い感動する。

親を助けて、一生懸命手伝おうとする子どもたちの一途な姿には、先進？諸国には見られなくなった発展途上？国の美しさと感動がある。

子どもたちが、ＭＣＬのスカラシップに応募してくる理由の９０％も、将来、大学に行って良い仕事について、親を助けたい！兄弟姉妹を学校に行かせてあげたい！

どんなに貧しくとも自分の家族を常に思って頑張り、食べ物が無く、電気も無い村の不便な生活でも、いつも故郷が懐かしい！

ここには、故郷という言葉、家族という言葉がちゃんと生きている。否、言葉が生きているのではない、故郷があり家族がある。そのようなミンダナオの良さを失いたくないし、むしろそこから学びたい。

ミンダナオ子ども図書館を、地域から孤立した施設とせずに、村の共同体とつながり一体となった運営をしようと考えてきた理由だ。

いよいよ植林がはじまった。当日は、さらに多くの奨学生たちが参加した。

イスラム教徒やクリスチャンの若者たちも参加した。積極的にボランティアに参加しつつ、別の地域の人々の生活状況を見るだけではなく、生活支援に積極的に関わる体験をする。その事が、将来どのような仕事につくにせよ、平和構築、生活構築にも意味がある事だとつくずく思う。

大切なのは、友だちになること。友だちになって、相手のことを自分の事のように思えること！そうした気持ちを育てることだ。

ＭＣＬの若者たちだけではなく地元の子どもたちも、もちろん参加。村には、ＭＣＬで建てた保育所があり、そこの子どもたちも、保育所の先生といっしょに植林に参加した。

日本の保育園の子どもたちも先生といっしょに、このような経験が出来ると良いのに！

自分たちの村を、自分たちの手で作っていく体験を・・・

お父さん、お母さんのお手伝いを友だちといっしょにすることの喜び！自分たちが、役に立っていることの深い満足感と誇り。それが顔にも表れている。要所要所で、大人が指示を出して教えてくれる。村全体が、一つの家族だ！

１２００本近いゴムの苗が、あっと言うまに植えられていく。最後に土をかぶせるのは、お父さんやお兄ちゃんの役割。肥料を加えて根が傷まないように押さえて土をかぶせていく。ゴムの木は大きくなると、５０年は収入が約束される。さらにその間、沢山の種が毎年落ち、それを拾って苗を育て、さらに自分たちの土地に移植し、ゴム林を増やしていける。

地元のお父さんたちといっしょに、まだまだ、無限に植林をしていかなければならない。まだまだ、無限に木を育て、子どもたちを育てて行かなくてはならない。

皆さん植林支援よろしくお願いします。

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。

ミンダナオとどうぶつたち

大野　民希

ミンダナオには、さすが南の国、日本にはいないいろいろな生き物がいる。

頭から上半身は鮮やかなきみどり色で、しっぽまでの下半身は銀色の、まるで魚釣りのルアーみたいな色づかいの大きなトカゲ。

全身カラスみたいに真っ黒で、でも眼だけ真っ赤なツバメをもうちょっと大きくしたような鳥は、なんだかちょっと不気味。

お調子者の鳥もいる。扇みたいな大きな尻尾を持った小鳥は白と黒でモノトーン。でも自慢のしっぽをつんと立てて開いたり閉じたりしながら辺りをクルックルッとうかがう姿はなんともオシャレ。

この鳥がおもしろい。窓から眺めていると、なんだか停められているスクーターの廻りでバタバタしている。なんだろうと思ってよーく見ていると、どうやらスクーターのミラーの前を飛びまわっているみたい。まるで美しい自分の姿に夢中で見惚れているみたいで笑ってしまう。

木陰をのんびり歩く猫を見つけてはしつこくすれすれをかすめ飛んでちょっかいをかけてみたりする、そんないたずらっこは、いつものように自分の姿に見惚れている隙に、物陰からこっそり忍び寄った猫に飛びかかられて、逆襲されるなんてこともあるおっちょこちょい。

アリだって多い。日本ではアリなんて「大きいアリ」「小さいアリ」そしてたまに「小さい茶色いアリ」がいるだけだと思っていた。

でも、アリも実に種類が多い。ペン先でちょんちょんと二つ点を描いただけ、そのくらい小さなアリから不思議なほど縦に細長いアリ、手足だけやたら長いアリ、大きな緑色のアリまで。

人に飼われている動物だっていろいろいる。山奥の村で、木でできた手作りのちいさな鳥かごに、鮮やかな緑や青やオレンジの原色の小鳥が飼われていたり、長いしっぽの小さなサルが家の前につながれていたり、ペットじゃないけれど日本でいう地鶏のような立派な尾羽を持った鶏や、黒くて小柄な豚なんかも家の周りにいるのがふつう。

なんだか深く遠い何かが見えているような哲学者の眼をした水牛や、サラブレットと違って小柄でおとなしい馬たちは山の大切な交通運搬手段。

もちろん犬や猫もたくさんいる。都会ではやっぱり鎖につながれて、檻に入れられて、もうとけてしまいそうに退屈な顔をして寝ている犬たちもいるけれど、特に田舎では実に自由にふらふらしている。

不思議に思ったのが、どの犬もいつも鼻先を地面につけていること。初めすごく変な感じがした。日本で見る犬は前を向いて歩いていたはず。どこかに移動する時も常に地面の匂いを嗅いでいる。何をしてるんだろうと思ったら、どうやら食べ物を探しているみたい。こっちの動物は痩せている。犬も猫も牛も、山の村ではなんともかわいそうなことに子犬でさえあばら骨がういていたりする。人間だって満足に食べられないんだからペットに十分な食べ物があるはずがない。

満足に食べれてないなんてかわいそう、確かにそうかもしれないけれど、でも飄々と歩き佇んでいる犬や猫には、実になんというか自分で生きている動物の誇りみたいなものが見れる。

なんだかんだ楽しそう。

空腹を取るか、自由のない「飼われる」生活を取るか。そんな選択を彼らができるわけないけれど、そう犬たちに聞いたら、日本のペットになりたいと言う犬たちは案外少ないんじゃないかなあと思ったりする。

もどかしいことに、自由というのは何か一定量が決まっているのかもしれない。天秤のように一方が十分にあれば、必然的に一方は少なくなってしまう。例えばミンダナオでは日本みたいに過剰に人目を気にしなくていい自由がある。行動を縛るせせこましいマナーからの自由、自己犠牲的に働きつめなくていい自由。心がふっと解放される。

でも日本には夜遅く一人で歩いたって平気な自由もある。好きな時に好きなものを好きなだけ食べられる自由、いつどこに居たって病院に行ける自由、いつでもインターネットにつながれる自由、電気、水は好きな時に好きなだけ使える自由。移動だって自由。安全なものを食べられる自由、政治に影響を及ぼせる自由。その自由が損なわれたときにニュースになるということは、その自由が当たり前に近いほどあるということの裏返しだから。

心の自由と命の自由、両方いっしょにあればいいのになあとじれったく思う。

ミンダナオでの6か月目である。

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
購読料程度の自由寄付で結構です。よろしくお願いします。

無題 3

松居陽

聞こえるのは、波の音、風の音、ココヤシの音。イヤホンはあっても、音楽を聴く気にはならない。生と死の詰まった、潮のにおい。
砂が足をくすぐり、塩が肌にべたつく。実体のない波も、銀河へ続く水平線も、目を据わらせてはくれない。宇宙という意識に溺れたひと時。

夢みたい。と、人は現実に目覚めたときに言うのだ、とお父さんは言う。概念上の世界を現実だと思い込むと、自然界を夢のように感じるのだと。
人声が静まり返れば、宇宙が無言で語りかけてくる。人と自然の間に境目はないはずなのに、僕も感じる、夢みたいだと。
後何時間見させてくれるだろう。

もうすぐ夜が明けて、人が起き出す。地位、財産、業績、またこの太りすぎたシステムが、ますます重い足を引きずって、ぎくしゃく走り始める。
空気を吸いつくし、水を飲みつくし、大地を踏みつくすまで。
それとも、奇跡が起こって、みな名も言葉も忘れて目を覚ますかも。
こんな夜は、そう星に願う。

朝が来れば、僕らは新たな目で互いを見つめあい、そこに表現しきれない愛を感じるだろう。
言葉が出ないもんだから、みんないっせいに笑い出し、抱き合い、声高らかに浜辺へ駆け出して、赤ん坊のようにピンクの水平線に見とれるだろう。
泣き出す者もいるかもしれない。次々と海に飛び込んで、水が肌を撫でる快感にうめき、身をよじらせるだろう。
でも、僕らがしないことがある。それは、それを海と呼ぶこと。それを美しいと呼ぶこと。
それを僕らと呼ぶこと。

もう、誰の振りもしなくていいんだ。もう、上にも、下にも、右にも、左にも、中にも、外にも立たなくていいんだ。人間くさい、裸、生きている、一緒に、生々しく。
自然体を恥じることはない。
体で感じる情熱を、好んで否定することはない。
死が自制心からの開放なら、今罪深い本性をさらけ出して、生きながらの死を祝おう。

どうせ、いつか気づきざるを得ないことだ。心は変えられても、血は変えられない。
知能が平等を望んでも、本能は支配したがり、されたがる。
頭は、体を指示するのではなく、体に耳を傾け、その声を忠実に表現するために生まれてきたのではないだろうか。

沖に、小船の光がちらつく。漁夫が、網を引き上げているようだ。
フィリピンの海や山に生きる、たくましい人々を見ると、どこかやるせない無力感に打たれる。
僕は、所詮今経済と呼ばれているシステムに取り入って、姑息に生きている人間だ。容赦ない自然界に生かされる術など、ほとんど持ち合わせていない。
それだけに僕らは心の奥に不安を抱き続け、それだけに彼らは自由なのかもしれない。何もかもをなくしても、自然の情けに命を許されるのだ。
おなかがすけば、魚を捕り、調理する法を、人は受け継いできた。病気にかかれば、治療する方法も。
そうか、言葉はやっぱり必要なんだ。

じゃあ、何でこんなに嫌気が差すんだろう。
小うるさい人間のドラマに、空っぽの言葉に。
今なら、永久保証、お買い得、愛！
言霊の嘆きが聞こえるようだ。
問題は、言葉が表すはずの本質が見失われているからかもしれない。
情報は増えても、その根源がいつにも増してあやふやになってきている。

体内に残った全ての声を、海にぶちまけたい。
波よ、さらっていってくれ！
この他愛もないおしゃべりを！

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているＭＣＬのサイト
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm
ウエッブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！

山菜売りの少女

前号からの続き

「ときどき、あの大きな木の下に、白い女が立っているって・・・。」

「馬鹿なこといっていないで、早く山菜を摘みなさい！そんな話は、ここではしないの！」

母さんが、顔を真っ赤にしていった。

「どうして？」ジョイジョイが、たずねると。母さんが答えた。

「どうしてって、あっちの人たちに聞かれたらどうするの！」

「あっちの人って？」

クリスティンが聞くと、母さんは、ちょっと憤慨したようすでいった。

「もう、あなたたちったら。あんたたちもマノボ族でしょ。だったらわかるでしょ。ほら、あれよ。」

そして、母さんは、子どもたちを近くに集めると、耳元でささやいた。

「妖精！

ここはね、天のさらに上と、地のさらに下の世界に通じている道がある、特別な場所なの。ほら、あそこに見える背の高いラワンの木、あれはねえ、ただの木じゃなくって、妖精たちが天に昇っていく道なのよ。それからこの池、ずーーっとずっと深く地の底まで続いていてね、裏側の世界にある池の底に出るの。

そんな特別な場所だから、ここには妖精たちがたくさん住んでいるの。妖精たちだけじゃなくて、いろんな見えないものたちがね。そんなわけでね、この場所に来たら静かにしなければいけないの。彼らの生活を、邪魔しないようにね。

特にしてはいけないのは、『妖精』という名前を大きな声でいったり話したりすること。自分たちの事が話されていると思うと、ふり向いてよってくるからね。

『きれいだなー』とか、『すてきな場所だなあ』とか、いってもだめよ。あっちの世界に引っぱられていったら、もどって来れないよ。山菜をつませていただいたら、すぐに帰るの。」

あたりはうっすらと開け始めてきた。ギンギンが言った。

「わたし、池の中のカンコンをつむね。だからクリスティンは、タクワイをつんで。ジョイジョイは、パコパコよ。」

子どもたちは、池のほとりに散らばると、それぞれの山菜をつみはじめた。

妖精たちの森

ギンギンは、裸足のまま、池に入っていった。池は泥でぬるっとしていて、たくさんのカンコンが生えている。緑色した長めの葉っぱと茎のカンコンは、つむとプチンと小さな小さな音がする。

カンコンにも妖精さんが、住んでいるかなあ。この池には、いろいろな妖精さんたちがいっぱい住んでいて、昼間でも水の上で踊ったり遊んだりしてるって、ばあちゃんいってたけど。

「いっしょに踊ったら、楽しいかなあ。でも、帰ってこれなかったら、どうしよう。」

ギンギンは、そういうと、ためしにぬるぬるの泥のうえを、妖精になったつもりですべってみた。

タクワイをつんでいるクリスティンは、水辺にたつと、小さな目をいっぱいに見開いて、ぐるりと池をみわたした。クリスティンも、妖精のことばかり考えていた。

確かに妖精はいるみたい。

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているＭＣＬのサイト
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm
ウエッブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！

夜になると、あの大きな木のまわりを、ぐるぐるめぐって、お星さまのところまでのぼっていくのね。お星さまや天使たちとあそんで、おひさまがのぼるころ、池のお家に帰ってくるんだ。

「妖精さん、いる?」クリスティンは、小さな目で大きな木を見あげていった。

ジョイジョイは、パコパコをつみながら、思った。パコパコの妖精さん、葉っぱのさきにぶら下がって、ブランコしながら遊んでいるかな。

「わたしも葉っぱのさきで、ブランコしてみたい。」

ジョイジョイは、パコパコの茎をつかむと、葉っぱの先をゆらしていった。

子どもたちは、妖精たちのことをいろいろ想像しながら、山菜をつみはじめた。つんだ山菜は、手がいっぱいになるたびに、母さんのところにもっていった。母さんは、山菜をうけとっては、岸辺にならべた黒いタライにつめていく。

蝉たちの声にまじって、小鳥たちがさえずりだした。あたりはしだいに明るくなり、川下からお日様がのぼる気配がしはじめた。

とつぜん太陽の光が、東のほうからこぼれだし、山の高みを赤くてらし、しだいに山をくだりはじめた。滝が、オレンジ色に輝いた。子どもたちは、むちゅうで山菜をつんでいる。

黒いタライが山菜で、ほぼいっぱいになったころ、朝日が、池のほとりの背の高いラワンの木の梢にとどいた。

そのとき、ギンギンの目の前を、カエルがスーッと横切った。

「あっ、カエル!」

ギンギンは、思わず手にしていたカンコンを放りだすと、しぶきをあげてカエルの後をおった。カエルは、水面を泳いで、カンコンのしげみにはいり、頭だけ出してこちらを見ている。

ギンギンはソーッと近づくと、カエルが逃げようと向こうをむいたとたん、飛びかかった。不意をうたれたカエルは、ギンギンの手の中でもがいている。

「つかまえたよー、カエル!早く早く!」

ギンギンは、カエルを水のなかから引きだすと、朝日のなかにさし上げた。

ギンギンの叫び声を聞いて、母さんは、腰に下げていた小さな竹カゴをはずし、近くにいたクリスティンにいった。

「これ、ギンギンにわたして!」

クリスティンは、竹カゴを受けとると、水しぶきを上げながら池に入っていった。

「姉ちゃん、これにカエル入れて!」

「クリスティン。そこにもいるよ。つかまえて!」

姉ちゃんは、クリスティンの少し前を指さすとさけんだ。

クリスティンは、そくざにカゴをカンコンの上におくと、姉ちゃんの指さすところにいるカエルに襲いかかった。

「やったー、つかまえたよ!」

朝日のなかで、クリスティンは、うれしそうにカエルを高くかかげた。

「やったねー。二匹とれたね。」

二人は、カエルをカゴにいれるとフタをした。

「これで、おかず出来たね。」

「ごちそう見つかって良かったね。カサバイモだけじゃさびしいもんね。」

岸の方をみると、母さんとジョイジョイも大喜びをしている。

その後も、6匹ほどカエルがとれた。

「さあ、もうたくさんとったから、帰りましょう。」

母さんの声で、子どもたちは、黒いタライのおいてある岸辺にあつまった。タライのなかには、たくさんのカンコンとタクワイとパコパコがつまっている。

小がらなジョイジョイがまず、タオルをたたんで頭にのせた。ギンギンとクリスティンは、二人でパコパコが

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。

いっぱいつまったタライを持ち上げると、ジョイジョイの頭にのせた。

次に母さんとギンギンが、タクワイのつまったタライをクリスティンの頭にのせ。最後に母さんが、カンコンのタライをギンギンにのせた。タライは、けっこう重い。それに、うまくバランスをとらないと、歩けない。山道は滑るし。

子どもたちがタライを頭にのせたとき、池ぜんたいに朝の光がながれこんできた。光は、妖精たちが、水しぶきをあげて、はねているみたいに、ぐるぐる踊りながら渦をまいて、カンコンやタクワイやパコパコのうえを走りぬけた。

「わー、光がうずをまいている！」ギンギンがさけんだ。

「しぶきをあげてる、きれいだねー。」クリスティンもさけんだ。

「妖精たちが、踊っているよ！」

大きな目をくりくりさせながら、ジョイジョイが、『妖精』という言葉を口にしたとたん、光は、子どもたちのまわりを、すごい早さでぐるぐるぐるぐるめぐりだした。

「あーっ！」

子どもたちがさけんだ、次の瞬間。光のうずは、三つにわかれ、子どもたちが頭にのせているタライの上に降りそそぎ、光のしぶきをまき散らした。

「何か、タライの上に乗ったみたい。」

ジョイジョイが、びっくりして、クリスティンを見上げた。ギンギンとクリスティンは、口をポカンとあけたままだ。

「さあ、お家へ帰りましょう。」

母さんも少しびっくりしたようだったけれど、つとめて冷静をよそおいながらいった。

三人は、池からぬけだすと、川ぞいに下っていった。

「何か、タライの上にのってるような気がする。」また、ジョイジョイがつぶやいた。

でも、だれも何も答えなかった。

ばあちゃん

家が近づいてくると、外には、姉ちゃんのインダイが、弟のビビィをおんぶして笑顔でむかえてくれた。

その横の岩には、ばあちゃんが、杖にあごをのせてすわっている。

「おかえりなちゃい。」ビビィが手をふっている。

「ただいま。」

「たくさん山菜とってきたよ。」

「カエルもとれた。」

子どもたちは、頭から、山菜がいっぱいつまっている重いタライを下ろした。母さんは、カエルのはいったカゴを台所にはこぶと、たきぎに火をつけてご飯の用意をはじめた。

岩にすわっていたばあちゃんは、帰ってきた子どもたちを笑顔でむかえるといった。

「あれまあ、子どもたちは、三人のお客様もいっしょに、連れて帰ってきたんだねえ。」

ジョイジョイは、目をまんまるにするとクリスティにいった。

「ばあちゃん、また不思議なことをいってるよ。」

ばあちゃんは、タライをじっと見つめるといった。

「青と赤と黄色の服に、きれいな刺繍。頭に巻いた緑の帽子。それにビーズの胸飾りまでつけて着飾って。あんたたち、これから誰かに、会いにでも行くのかね？」

クリスティンは、ばあちゃんにちかよると、不思議そうにたずねた。

「ばあちゃん、だれと話しているの？」

「あんたらには、見えないのかい。ほら、赤い服着ているのがカンコンさんで、青い服がタクワイさん。パコパコさんは黄色い服。三人の妖精さんたち、タライの上にすわっていらっしゃるだろうに。」

ばあちゃんには、何かが見えているようだけど、わたしたち子どもには何も見えないし聞こえない。

ばあちゃんは、首をたてにふってうなずきながらいった。

「マオンガゴン酋長にお願いがあるんだって。そうかい、そうかい。マオンガゴン酋長は元気かね。会っ

たら、わたしからもよろしくって伝えておくれ。もうじきそっちに行く日も近いだろうって。そうかい、そうかい。」

どうやら、ばあちゃんの話している様子を見ていると、ギンギンが頭にのせてきたタライのうえにはカンコンの妖精さんが、クリスティンのタライにはタクワイの妖精さんが、ジョイジョイのタライには、パコパコの妖精さんが、マノボ族そっくりの格好で、頭に緑の帽子を巻き、きれいな刺繍の入った赤と青と黄色の服を着て座っているらしい。胸にはビーズの首飾りをつけて。

「カエルの煮こみ、できたわよ。冷めないうちに食べなさい！」家のなかから、母さんの声が聞こえた。

「ばあちゃん、おいでよ。カエル食べよう。」クリスティンがさそっても、ばあちゃんは、タライの方を見ては、ぶつぶつ何かをつぶやいている。

「おいでよ、クリスティン」ギンギンはいった。

「ばあちゃん、妖精さんたちとのお話に夢中なのよ。

後で食べると思うよ。わたしたち、先に食べなくっちゃ。食べ終わったら、町に野菜売りにいくんだから。」

山の生活

カエルの煮物とふかしたカサバイモをたべおわると、ギンギンとクリスティンとジョイジョイは、山菜のいっぱいつまった黒いタライへとかけていった。

ばあちゃんは、あいかわらず小さな岩に腰かけて、いつのまにかすやすやと眠っている。くんだ両手を杖において、その上にアゴをのせたまま。

わたしたちは、ばあちゃんを起こさないように、タライを頭にのせると、谷間の家を後にした。

踏みあとを少しくだって、川までおりたら対岸にわたる。ギンギンが先にたち、クリスティンとジョイジョイが後につづき、水のなかから頭をだしている石の上を、注意深くすべらないようにわたった。

斜面に出来たジグザグ道をのぼる。

ギンギンは、ときどきふりかえっては、一番後ろの小さなジョイジョイが、ついてくるかどうかを確かめながら歩いた。踏みあとは、森のなかへとつづいている。

パコパコは、山菜のなかでは軽いけれども、ジョイジョイにはけっこう重い。

「すべらないように、気をつけてね。」

ギンギンが、後ろに向かってさけんだ。

ほんとだったらジョイジョイは、今年から一年生になるはず。でも去年、保育所に入れなかったから、小学校にはあがれない。

かわいそうなジョイジョイ。そう思ったとたん、また声が聞こえた。

「なんで、保育所に行かないと、小学校に入れないの？」

ギンギンは、声がするのになれてきた。

わたしにも本当のことは、わからないの。小学校に行く子は、せめてＡＢＣが書けないと、先生が困るからって聞いたわ。新しい規則だって。

「でも、山おくの貧しい村だったら、保育所なんか、ないでしょう。どうするの？」

木の下で勉強したりするんだって。姉ちゃんが嫁いだアポイアポイ村なんか、貧しくて保育所も建てられないし、先生がいないんだって。

「なぜ？」

せめて高校を卒業しないと、先生になれないからよ。

姉ちゃんの村は、貧しくて、エンピツも買えなかったり、お弁当も持って行けなかったりする子がほとんどなの。時には五日も、ご飯が食べられなかったりするのよ。

「5日も食べなかったら、お腹ペコペコになるでしょう！」

ペコペコを超えて、とっても痛くなってくるのよ。小学校まで行けば幼稚園があるけど、山道を8キロも歩いて通うから大変。小学生たち、朝四時に出かけるのよ。

（次号に続く）

電話番号：080－4423－2998（日本から現地直通）
09219603640（Tomo Matsui Cell phone in Philippines）
日本事務局；Fax 専用　093－473－7710（内容は本部に転送されます）
メール：mclstaff@zar.att.ne.jp(松居友)

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日三食たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても病院に行けないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）

直接下記の振替口座にお願いします。寄付をくださった全ての方々には、。
年四回、４月、６月、８月、１０月、１２月に季刊誌『ミンダナオの風』をお送りしています。

2，大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・年額６００００円（月額５０００円）

振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、
年５回の季刊誌に同封して、本人からの手紙、４月スナップ写真、６月に成績表
８月にプロフィール、１０月は機関誌のみ、１２月にクリスマスカードなどが届きます。
新規奨学生の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。
文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。

3，里子支援（小学生）・・・年額３００００円（月額２５００円）

振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、季刊誌に同封して、
４月にスナップ写真、６月は機関誌のみ、８月にプロフィール、１２月にクリスマスカード
が届きます。新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。
文通やプレゼントも可能ですが、隔月の学用品と一緒に僻地に届けて返事をもらうため
返事は機関誌に同封する形で半年ほど後になる可能性があります。訪問の際は自宅にご案内。

4、保育所・下宿小屋建設支援・・・３０万円（分割可能になりました）

振り込み用紙の通信欄に「保育所」または「下宿小屋」と書いて振り込んでいただければ、
季刊誌をお送りすると同時に、１０月には毎年現地の保育所や下宿小屋の写真報告をお届け。
開所式参加や訪問も可能です。

5，植林環境支援・・・５万円（ゴムの木６００本、１ヘクタール、現地作業代込み）

洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。

6、古着等の物資支援・・・郵送およびフィリピン宅配フォーレックスが便利です。

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

スカラシップ・里親に関する質問、または現地訪問その他に関する問合せは、電話かメールかファックスで。
日本事務局は、完全ボランティアのためFAXのみ受け付けています。
メール：mclstaff@zar.att.ne.jp(松居友)
電話番号：080－4423－2998（日本および日本から現地転送・松居友）
09219603640(Tomo Matsui Cell phone in Philippines/ 現地携帯・フィリピン国内ではこの電話番号へ)
日本事務局；Fax 専用　093－ 473 － 7710（内容は本部に転送されます）
現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines